

# 道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を高める指導の工夫 ～登場人物への自我関与を通して～

提案者 栃教協教研推進委員会 教員部

益子町立七井小学校 教諭

佐藤 椋 亮

日光市立轟小学校 教諭

板垣 大 史

## 1. はじめに

我が国の道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものとされてきた。平成27年3月27日の学校教育法施行規則の改正により、「道徳」を「特別の教科である道徳」とするとともに、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正が告示された。そして小学校では平成30年度から、中学校では令和元年度から、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」と変更され、教科化となった。

栃教協教研推進委員会教員部では、長年継続して、「心の教育」及び「道徳教育」の研究を行ってきた。本部会では、平成29年度より3カ年計画で「道徳評価シート」を活用した道徳の評価及び指導と評価の一体化について研究を行ってきた。時間毎の児童生徒の評価を蓄積することで変容が捉えやすくなったこと、また、評価の視点が明確になることで指導の改善が図られ、児童生徒の道徳的価値への理解が深まってきたなどの成果を得ることができた。

本年度は、昨年度までの研究を基に、文科省が示す「質の高い多様な指導方法」の1つである、「登場人物への自我関与が中心の学習」の指導方法を研究する。児童生徒が登場人物に自分を投影して考えられるようにする手立てを実践し、その効果を検証することで、効果的な指導方法を提案する。

## 2. 提案内容

### (1) 道徳評価シートについて

#### ○作成までの経緯



リンク：道徳評価シート ダウンロードページ  
<https://www.t-t-c.org/jissen/2559>

本部会では、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」（平成28年7月）の資料を基に、児童生徒の変容や成長を長期的に見取る評価方法の工夫を考えた。そして大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うために、毎時間の見取ができ、かつその見取の蓄積により長期間の変容が捉えられる評価シートを作成した。見取の視点については、専門家会議の資料を基に、下記の4視点を設定した。

#### 《道徳評価シート見取の視点》

##### 【視点①】意欲的に考えている

ねらいとする道徳的価値について意欲的に考えようとしているか、授業中の発言や話し合いへの参加の様子、ワークシートへの記述など様々な場面で見取る。できていれば○。

【視点②】登場人物を自分に置き換えて考えようとしている

発言やワークシートの記述などから見取る。具体的に自分だったらどうするかなどと、登場人物を自分に置き換えて考えている様子が見られれば○。発問を工夫したり、「自分の体験談が書かれていること」など見取りの手掛かりとなる表記を決めたりしておくのも良い。

【視点③】友達の意見を参考にしながら多面的・多角的に考えようとしている

発言やワークシートの記述などから見取る。友達の意見についての考えを述べさせたり、話し合い活動を取り入れたりして、他者の意見についての考えを交流し合う場面を設定することにより見取ることができる。

友達の発言をしっかりと聞き、友達の考えと自分の考えの違いを認めていたり、道徳的価値について複数の視点から考えていたりしていれば○。手掛かりとなる表記として「最初は～と思っていたけれど、～と考えるようになった」など、感じ方・考え方の変化が見取れるものが挙げられる。

【視点④】今までの自分を振り返り、これからの自分の生き方について考えようとしている

授業の振り返りの場面での発言やワークシートの記述から見取る。授業で扱った道徳的価値に対する今までの自分の考え方を見つめ直していたり、これから自分はどうしていきたいか、どのような人になりたいか、どのように生きていきたいかなど考えたりしている発言や表記が見取れれば○。

(2) 登場人物への自我関与に重点を置いた授業の工夫

○小学校低学年実践「二つのことり」

【教具の工夫】

①「自分カード」と「ハートの大きさカード」

自分が誰になりきって考えているかを視覚的に分かりやすく工夫し、教材の世界での出来事を自分の事として捉えやすくすることができた。また、児童に「登場人物のうれしい・楽しい気持ちの度合い」を大きさの異なるハートのカードの中から選ばせた。うぐいすの家に行ったときと、やまがらの家に行ったときのうれしさ・楽しさでは気持ちの大きさが異なると考え、気持ちの変容を目で見てわかるようにした。



自分カード



ハートの大きさカード

## ②資料揭示の工夫

教材を読むだけではなく、パネルシアターの形式にすることで、物語の流れを児童が視覚的に捉えやすいようにした。物語に合わせて、登場人物の絵をホワイトボード上で操作することによって、自分の事として捉えることが苦手な低学年の児童にとっても内容理解が優しくなり、自我関与しやすくなった。



パネルシアター

## ○小学校低・中・高学年「泣いた赤おに」

### 【役割演技】

教材を読んだ際に、一場面を登場人物になりきって児童に演じさせた。登場人物の一人である「赤おに」のおかれている状況や気持ちを一つずつ整理していくことができた。

また、状況が整理されていく中で、「この場面では、村人が後ろで観ているはずだ。」と児童から自然と発言が上がり、進んで村人役も演じていた。役割演技をすることで登場人物への感情移入がスムーズに行え、自我関与に繋がった。評価シートでも、視点②に○がつく児童を多く見取ることができた。

赤おに・青おに



村人役の児童

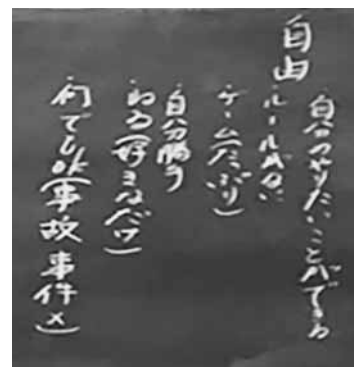
役割演技

## ○小学校高学年・中学校実践「移動教室の夜」「修学旅行の夜」

### 【発問の工夫】

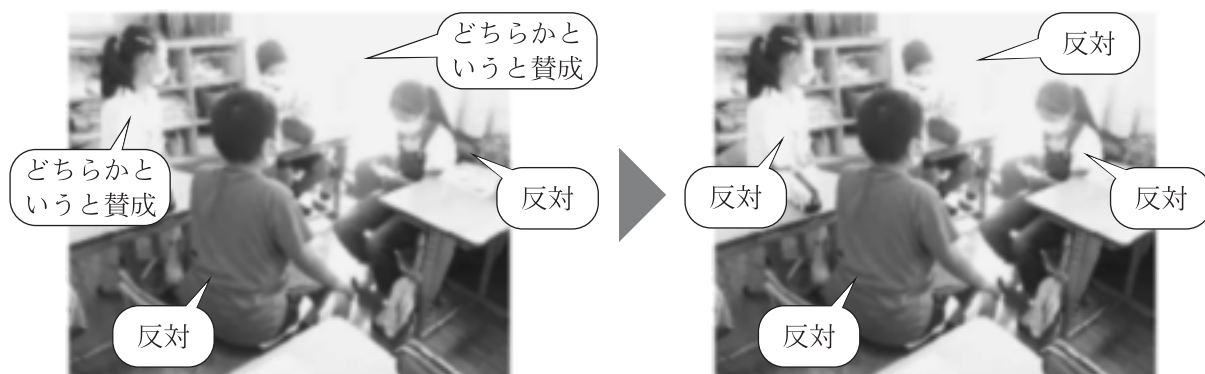
「自由とは」と最初に投げかけ考えさせることで、児童生徒から「自由」と「自分勝手」という言葉を出させるようにした。また、補助発問で「自由がないと困りますか。」と投げかけることで、困る理由を考えるように仕向け、問題意識へと繋げていった。

最後には、もう一度「自由とは」と同じ質問を児童生徒に投げかけ、児童生徒自身が価値の変容を見て取れるよう工夫した。



### 【立場の表明】

小学校高学年の実践では、主人公の行動に賛成か反対かを児童生徒に考えさせ、意見を交わさせた。意見を交わす中で、友達の意見を参考にしながら多面的・多角的に考えようとしていた。また、中学校での実践では生徒から出てきた「自由」と「自分勝手」についてそれぞれの立場に立って意見を交流させた。両方の立場になって考えることで「自由」と「自分勝手」の違いが明確になった。立場や意思を明確に示すことで、価値への理解が深まった。



## 3. 成果と今後の課題

### (1) 成 果

- ・他学年の教材でも、それぞれの学年に応じた発問を工夫することで、児童生徒は自我関与しながら道徳的価値の理解を深めることができた。
- ・発達段階に応じた教具を工夫し、自分の意見を表出させ、それに対して理由を述べさせることで、自我関与しながら主体的に考える児童生徒の姿が見取れた。
- ・役割演技や両方の立場に立っての議論など、授業展開や話し合いを工夫することで、児童生徒の自我関与を促し、道徳的価値の理解が深まる一助となった。

### (2) 課 題

- ・発達段階や児童の実態に応じて、有効な手立てを考える必要がある。
- ・自我関与させるための、より有効な手立てを考えていく必要がある。
- ・より質の高い指導方法を研究する必要がある。